

シーア派とは何か

静岡県立大学 国際関係学部

准教授 宮田 律

シーア派はイランのサファヴィー朝で国教として採用されて以来、イランの王朝が過去に支配した地域を中心に信仰されてきた。イラン以外ではイラク南部、バーレーン、アゼルバイジャン、アフガニスタンなどイランの歴史とは無縁ではないところで採用されている。特に、イランでは全人口のおよそ90%がシーア派と見積もられ、圧倒的多数となっている。また、イラン以外でもイラク、バーレーン、アゼルバイジャンでシーア派は国内最大多数の宗派となっている。イランから離れた地域でシーア派信仰が根づいているのは、レバノンとイエメンだが、レバノンのシーア派政治組織はイランとの強い結びつきが指摘されている。以下では、最近メディアなどで話題に上ることが多いシーア派の起源、歴史的展開、特徴、地理的な広がりなどについて紹介したいと思う。

スンニ派・シーア派分派の起源

イスラムの創始者、ムハンマド・イブン・アブドゥッラーは、西暦570年に生まれた。父親は、ムハンマドが生まれる以前に亡くなり、母のアミーナもムハンマドがわずか6歳の時に他界した。ムハンマドは、その青年期にメッカの隊商交易に従事していたが、メッカはインド洋と地中海の通商ルートの途上にあり、またアフリカから中東を通して中国、マレーシアに至る交易の中継地でもあった。

ムハンマドは富裕な未亡人、ハディースの隊商の執事となり、ムハンマドが25歳、またハディースが40歳の時に二人は結婚する。二人は仲睦まじく結婚生活を送り、3人の男子と4人の女子の子供に恵まれたが、娘のうち一人、ファティマは後に第四代カリフ（ムハンマドの後継者）で、またシーア派初代イマーム（シーア派教徒が認めるイスラム共同体の指導者）となるアリーと結婚した。

ムハンマドは、メッカ郊外のヒラー山の洞窟にこもって瞑想にふけるようになっていく。この瞑想の中で、彼は自らの人生や社会の病弊などに考えをめぐらし、40歳の時に天使ガブリエルを介して神の啓示を初めて聞くことになったが、その最初の言葉は「読め！」であった。ムハンマドは、その後22年間（西暦610年～632年）、亡くなるまで神の啓示を伝え続けたが、彼が神から預かり伝えた言葉をまとめたものが啓典「クルアーン」である。

シーア派の誕生

632年のムハンマドの死後、イスラム共同体は正統カリフ時代（632年～661年）を迎える。4人の正統カリフたちは、すべて預言者と同時代の仲間であり、イスラム共同体の使命を分かち合った者たちであった。この時代もまた、後世のムスリムたちにとって、その行動の指針を与えるようなイスラムの理想の時代であった。これらの力

リフは、預言者ではなかったが、共同体の政治的、また軍事的な指導者であった。初代カリフのアブー・バクル（在位632年～634年）は、預言者ムハンマドの義父であり、ムハンマドの存命中に金曜日の礼拝をムハンマドに代わって指導することもあった。思慮と敬虔さでムスリムの尊崇を集めていたアブー・バクルは、ムハンマド死後の部族の反乱を平定し、イスラム共同体の統一を守った。

第二代カリフのウマル（在位634年～644年）の時代は、イスラムの征服と拡張の時期で、彼には「信義の司令官」、「神の預言者の代理」などの称号がつけられた。病床でウマルは、次期カリフを選出するためのグループを指名する。このグループがカリフとして選んだのは、ウマイヤ部族出身のウスマーン・イブン・アフアンであった。

しかし、このウマイヤ部族は預言者の強力な敵対勢力であり、古くからの預言者の支持者たちの中には、このウスマーンの選出について反発する者たちが少なくなかった。ウスマーンのカリフへの選出によって、ウマイヤ家は富を蓄え、また名声を博していく。しかし、ウスマーンは強いリーダーシップを発揮できるような指導者としての資質に欠けていた。ウスマーンのカリフとしてのひ弱さと縁者びいきは政治的陰謀を加速させ、結局彼は656年、エジプトからの暴徒によって暗殺される。

このウスマーンを継いだのが、アリー・イブン・アビー・ターリブ（在位656年～661年）であった。アリーは、ムハンマドに献身的に仕え、イスラムに早くから帰依した人物である。アリーは預言者の従兄弟であり、また預言者とハディースの娘、ファティマの夫でもあり、アリーとファティマの間にはハサンとフサインという二人の息子がいた。アリーにはカリスマ的性格があり、多くのアリーの支持者たちは、イスラム共同体の指導者は預言者の一族から選

ばれるべきであり、実際に預言者はアリーを後継者として指名したのだと考えた。このアリーを支持する「党派（アラビア語でシーア）」がシーア派と呼ばれる宗派である。

スンニ派とシーア派の違い

スンニ派とシーア派の根本的相違は、スンニ派ではカリフは選ばれた預言者の後継者であり、イスラム共同体の政治的・軍事的指導者であったが、ムハンマドのような宗教的権威はもっていない。それに対してシーア派では、ムスリム共同体の指導権はアリーの世襲の子孫であるイマームにあり、このイマームは預言者ではないが、宗教的な権威を有し、また誤謬も、道徳的な罪もないイスラム共同体の指導者であった。つまり、スンニ派とシーア派の決定的な違いはイスラム共同体の指導者が誰であるかであり、スンニ派の場合は選ばれた者、シーア派はムハンマドの血筋を引くアリーの子孫ということになる。

さらに、スンニ派とシーア派は異なる歴史的見解も発展させる。スンニ派の歴史家にとって、イスラム共同体の成功と力は、神に導かれたものであって、信仰深き共同体への神の報酬であり、またムスリムの信仰や訴えを神が確認したものであった。

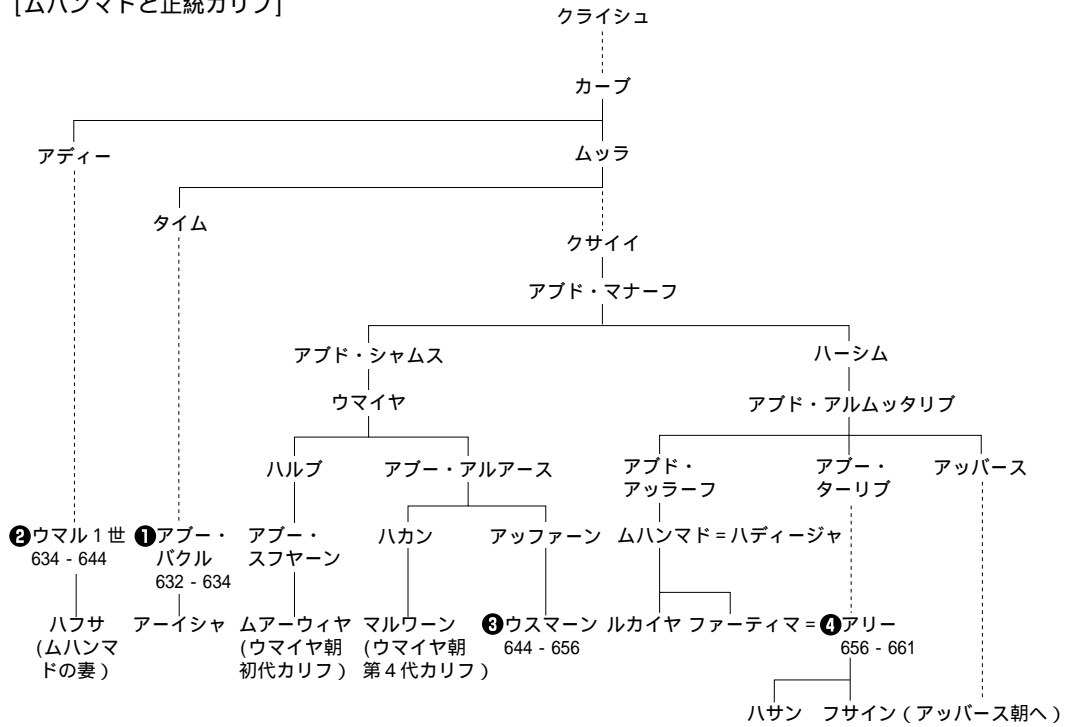
これに対してシーア派は、歴史とは抑圧され、生きる権利を奪われた者たちの闘争の舞台であり、イマームによって指導される共同体が神の支配を復活させるものであると主張する。初代イマームのアリーがウマイヤ朝の創始者であるムアーウィヤと敵対し、またアリーの息子で、第三代イマームのフサインがムアーウィヤの息子であるヤズィードの軍隊と戦ったように、歴史とは悪魔の勢力に対して神の法を復活させ、イマームによる正義の支配を確立することである。

フサインのように受難するイマームの姿（フ

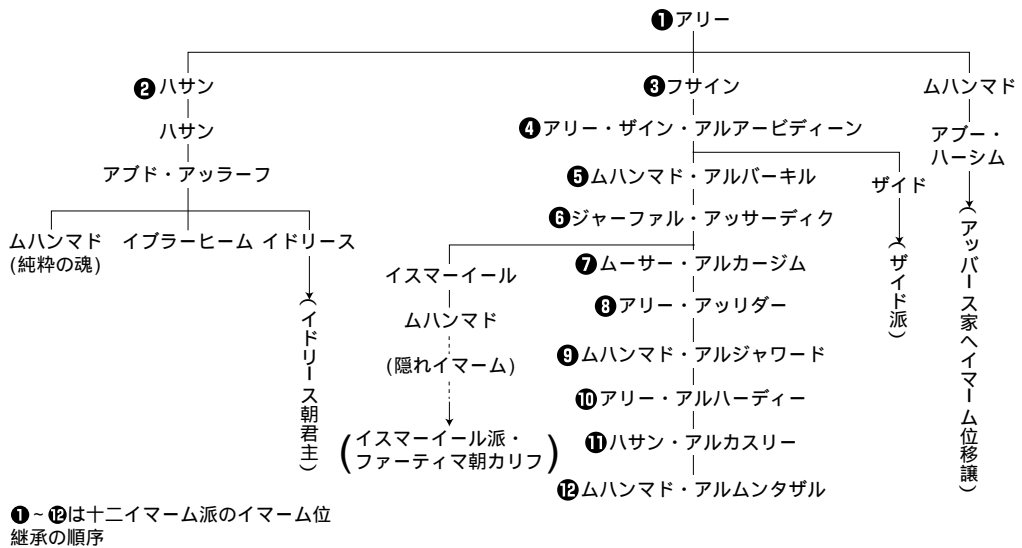
系 図

黒丸数字は継承の順序を，人名に付した年号は在位年を示す

[ムハンマドと正統カリフ]



[アリー家とシーア派諸派]



出典：『イスラム事典』，平凡社

サインはヤズィードのウマイヤ朝軍によってイラクのカルバラで680年に殺害された)は、迫害を受ける少数派コミュニティによって経験される抑圧や不正を具体化するものと考えられた。イマームの下でのイスラム共同体における正義の実現というシーア派の理念は、イスラム世界の大部分がスンニ派のカリフの下に置かれたために、実現されることがなく現在に至っている。

さらに分派したシーア派

シーア派は、誰がアリーの子孫(=イマーム)であるかをめぐって三つの派に分かれている。すなわち、①ザイド派、②十二イマーム派、③イスマーイール派である。

ザイド派は、フセインの孫であるザイド・イブン・アリーが第5代イマームであると主張する。他方、シーア派の大多数は、第4代イマームの子で、ザイド・イブン・アリーの兄であるムハンマド・アルバーキルを第5代イマームと主張する。また、シーア派の大多数は第4代カリフのアリーとファーティマの子孫のみを正統なイマームと見なすのに対して、ザイド派は、アリーの子孫ならば誰でもイマームになり得ると考える。

ザイド派は、ウマイヤ朝、アッバース朝に対して反旗をひるがえしたが、すでに864年にカスピ海沿岸のタバレスターンにザイド朝をつくり、また893年にイエメンでザイド派の王朝であるラッシー朝を築いた。このイエメンのイマームは1962年の王国崩壊まで継続し、イエメンのシーア派ではこのザイド派が圧倒的に多い。

また、8世紀には、第6代イマーム、ジャーファル・アッサーディクが誰を後継者に指名したかによって、ザイド派を除くシーア派多数派が十二イマーム派とイスマーイール派に分裂する。

シーア派の中の最大多数=十二イマーム派

十二イマーム派は、サーディクの息子で、弟のムーサー・アルカージムを後継と見なし、またイスマーイール派は兄のイスマーイールを指名したと考えた。

十二イマーム派の考えでは、イマーム位の継承は、874年に12代イマームのムハンマド・アル・ムンタザルが行方不明になった時に終了する。この行方不明になったムハンマド・アル・ムンタザルが信徒の苦難の時代に、社会正義と平等をもたらすために、マフディー(救世主)としてこの世に再臨すると十二イマーム派は考える。現在、この十二イマーム派の信仰は、イラン・イスラム共和国で盛んであり、多くのイラン人はこの十二イマームの考えを支持し、それがイランの政治・社会の性格ともなっている。実際、イラン・イスラム共和国憲法は、この12代イマームが神隠れしている間は、最高指導者が「神隠れイマーム」の代理として現世の統治を行うと定めている。

この十二イマーム派が現在シーア派の最大多数で、全シーア派人口のおよそ85%を構成すると見積られる。イラン、アゼルバイジャン、バーレーン、イラク、レバノンのシーア派はこの十二イマーム派に属す。また、インド、パキスタン、クウェート、サウジアラビアのシーア派マイノリティも十二イマーム派である。

他方、イスマーイール派は当初過激な傾向をもち、スンニ派の政治・宗教指導者たちを暗殺する活動を行い、最盛期にはエジプトからインド北部までを支配した。このイスマーイール派は、イスラムの真の教えはイマームに伝えられ、イマームのメッセージや支配を広めるには力行使することもやむをえないという考えをもっていた。

このイスマーイール派は969年にエジプトのカイロにファーティマ朝の支配を確立したが、この王朝は預言者ムハンマドの娘で、初代イ

マーム、アリーの妻であるファティマの名前を王朝の名として用いた。このファティマ朝の支配は十字軍を後にエルサレムから駆逐するサラディンのエジプト支配によって1171年に終焉を迎えた。現在、東アフリカ、南アジア、イギリス、カナダで経済活動を行うアガー・ハーン一族はイスマール派信仰の流れを汲んでいる。

現代におけるシーア派の地域的広がり

バーレーンでは、シーア派が多数派であるにもかかわらず、なぜスンニ派の支配層なのか。それはバーレーンの歴史に関係がある。シーア派を国教とするイランのサファヴィー朝によって支配されイランからの植民者が移住したことや、そのシーア派信仰に影響されたことがバーレーンでのシーア派信仰を根づかせることになった。しかし、1783年に現在のサウジアラビアのアル・ハサ州出身のハリーフア族の首長たちがイランの有力者たちを追いだし、支配を始めた。

このハリーフア族はスンニ派であり、現在まで続くスンニ派支配を形づくることになった。1820年にイギリスはバーレーンでの排他的な経済利権を獲得するために、イギリス・バーレーン条約を結び、さらに1861年にバーレーンを保護国とした。1970年までパフラヴィー朝(1925年～79年)のイランがバーレーンに対する領土要求を行い、イランの一部としようとしたが、イギリスはこれに応じることがなく、イギリスはハリーフア族を介してバーレーンを支配し、その統治形態が1971年の独立後も続くことになる。

アラブ世界でシーア派信仰が盛んな国としては、イランの隣国であるイラクがある。イラクでは、シーア派系住民が55%と宗派別人口の上では最も多数派を構成する。これは、イラクがウマイヤ朝やアッバース朝(現在のイラクと同

様にバグダードが首都)などシーア派信仰が盛んであった頃に宗派活動の場であったこと、またシーア派の聖地であるナジャフ(初代イマームのアリーの墓所がある)とカルバラ(アリーの甥のフサインがウマイヤ朝軍によって殺害されたところ)の存在と無関係ではない。これら聖地はまたシーア派神学を中心でもあり、同じくシーア派の聖地や神学校があるイランと巡礼や学生の往来を通じて深い関わりをもち、相互に影響しあってきた。

サダム・フセイン政権が崩壊するまでイラクでスンニ派による少数独裁政権が続いていたのは、イラクの歴史に関係することだ。オスマン帝国はスンニ派住民を介してイラクを支配していた。第一次世界大戦でオスマン帝国が敗れると、イラクはイギリスが国際連盟より委任されて統治するようになったが、イギリスもまたオスマン帝国の流儀を踏襲してスンニ派の協力を得ながら支配を行った。イラクは独立後、ハースィム家の王政となったが、この王家もまたスンニ派で、サダム・フセイン政権の与党であるバアス党もフセイン大統領がスンニ派であったように、スンニ派中心の政治が行われていた。

18世紀にイラクのナジャフとカルバラでシーア派の一大神学論争が行われ、現世の聖職者の判断と論証を重視する「ウスーリー派」が預言者や歴代イマームの伝承に頼る「アフパーリー派」に勝利をおさめる。このウスーリー派の勝利によってシーア派社会では現在に生きる聖職者の役割が増大し、ムジュタヒドと呼ばれる高位聖職者は「神隠れ」したと考えられているイマームに代わってシーア社会に法的な判断を下し、聖戦の認可など最も重要な宗教的行為を行う資格を与えられ、政治性を強めていくことになった。

そしてイラクの隣国イランではウスーリー派によって与えられた聖職者の政治的役割は1979年の革命の過程で強調され、イスラム共和国憲

法も「イスラムの法学者(=「神隠れイマーム」の代理)」による統治をうたっている。この「政治性」が現在のイランの宗教社会を大きく特徴づけ、シーア派世界の「盟主」としての自覚をもたせ、地域に重要な影響を及ぼすようになった。

イエメンで、北イエメン時代も含めると、32年間政権の座にあったサーレ八大統領に対する不満が台頭したのは、長期にわたって権威主義的な政治が行われたこととともに、彼の息子を後継者として考えたことがある。国の最高指導者を世襲にすることは、預言者の子孫であるイマームの家系がイスラム共同体の指導者であるべきというシーア派ザイド派(既述のようにイエメンで信仰されるシーア派の一派。人口の50%ぐらいを構成。サーレ八大統領はこの宗派出身)の教義とは合わない。

地中海に面するレバノンのシーア派はすでに7世紀にイスラムがスンニ派、シーア派に分裂した当初から存在していた。第二次世界大戦中、レバノンの委任統治国であったフランスの影響力がドイツに占領されたこともあって後退すると、代わってイギリスがレバノン内政を左右するようになる。イギリスの仲介で1943年にペイルートのスンニ派とキリスト教马龙派は「国民協約」に合意した。この「国民協約」では、马龙派に大統領職と国軍司令長官のポストが、スンニ派には首相職が与えられたが、シーア派は国会議長職を割り当てられたにとどまった。

この「国民協約」の時期には、レバノンのシーア派は、人口の上では第3位のコミュニティであったが、1980年代には最大の宗派になるほどシーア派人口は増加した。レバノンのシーア派は貧困の状態に置かれ、病気や非識字が顕著で、電気・学校・病院などインフラ面で他のレバノンの地域から極端に後れをとった。人口の上では急激に増加しても、シーア派は行政的な

どの雇用機会では10%にも満たない状態が続いた。

こうした情勢でも、レバノンのシーア派社会には政治的動きが現れなかったが、ウラマー(聖職者)のムーサー・アル・サドルを得て次第に政治化していく。1928年にイランで生まれた彼は、59年にレバノンに移住し、レバノンの経済発展の恩恵を受けないシーア社会の福利向上を訴えた。アル・サドルは「被抑圧者の運動」(=後の「アマル」)という組織を設立し、シーア派社会に対する「不正義」の是正を強く主張し、彼のカリスマ的性格とともに「アマル」は急速に勢力を拡大する。アル・サドルは78年8月にリビアを訪問した際に突然姿を消した。

さらに、1982年にイスラエルがレバノンに侵攻すると、過激な傾向がシーア派社会に生まれ、現在でもイスラエルとの先鋭な闘争を繰り広げるヒズボラが成立した。ヒズボラは、シーア派でありながらも、イスラエルに対する闘争姿勢を貫くことがスンニ派世界でも少なからぬ支持を集めることになっている。

サウジアラビアの国教は、スンニ派の厳格な宗派であるワッハーブ派であるが、ワッハーブ派の教義とシーア派のそれとは大きな相違がある。ワッハーブ派では、モスクにミナレットをつくることをしない。シーア派のイランでは、初代イマームのアリーの像が飾られている光景を目にすることがあるが、偶像崇拜を否定するワッハーブ派は19世紀初頭に預言者ムハンマドの墓廟も破壊するなど厳しいイスラムの教義に訴えている。

シーア派の今日

シーア派は、イスラム成立後5世紀にわたってイスラム世界で一つの勢力として活動するが、その後衰退する傾向にあった。シーア派信仰を再び蘇らせたのは、イランのサファヴィー朝による国教としての採用以来のことで、イラ

ンでは主流の宗派としての地位を確立し、現在に及んでいる。他方、アラブ世界ではシーア派は政治・宗教・社会を支配するような宗派とはなりえなかった。それが、現在特筆すべきシーア派勢力がアラブ世界において衰退する以前の地域、すなわちスエズ運河以東にしか存在しないことの原因となっている。

現代におけるシーア派が特に注目を集めるきっかけとなったのは、1979年のイラン革命で、シーア派の聖職者が法的な判断を下す統治体制ができあがった。イラクでサダム・フセイン政

権が崩壊して、シーア派を中心にする政府ができ上がり、また、レバノンではシーア派の政治組織であるヒズボラがイスラエルに対する闘争姿勢をいっこうに崩さない。特にサダム・フセイン政権崩壊後の新政府はアラブ世界では初めてのシーア派主導の政府であり、それがシーア派少数派を抱える国々の重大な関心を集めることになっている。シーア派住民がいる国々は、宗教的な考えが相違するシーア派をいかに社会に取り込んでいくかが、今後克服すべき課題であることはいまさら強調するまでもなからう。